

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

1日

赤口 鶯婁

旧3月4日

火曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

じ
ちゆう しゆ ふく ぞう
地中衆伏蔵

「地中の鉱物金属にも仏の慈悲が行き渡る」

清浄な鼻を得ると地中に埋もれた鉱脈や金・銀・
宝物まで探すことができる」と説かれています。

生物以外の鉱物や金属までをいのちあるものと
して認識されています。

私たちが住む国土の天地山川草木等、心を持たな
い自然界のすべてに仏さまの慈悲が行き渡ると
とらえられているのです。

まさに地球全体が生命体として認識されている
のが仏教の世界観です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

2日

先勝 参

旧3月5日

水曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

せん

しょう

に

ぎ

ぜん

専精而坐禅

「坐禅に専念する」

禅宗でいう「坐禅」は、ひたすら坐って静かに一切の雑念を払う修行です。

一切の雑念を払う坐禅も時には必要ですが、ただ静かに考えて心を練る時間も大切です。

一日に数分でもよいから静かに考えて、今まで歩んできた道を振り返り、これから進む道を確認する時間があってもよいのではないのでしょうか。

鼻根が清浄になると、日々坐禅に専念している人の白いもわかると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

3日

友引 井

旧3月6日

木曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

ぜつ こん しょう じょう

舌根清浄

「清浄な舌で味わう」

舌の功德には、食物の味わいが良くなるということと、自分が説くことが相手に正確に伝わり大きな効果を挙げるといふ二つがあります。気分次第で食物の味は変わってきます。楽しいときには美味しく感じ、怒っているときには何を食べても不味く感じ、悲しいときには何の味も感じないという経験があると思います。法華経を受持し心が安定すれば、食物をしつかり味わい、身心の栄養とすることができるといふのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

4日

清明

先負 鬼

旧3月7日

金曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

すい じん みよう しょう

出深妙声

「深妙の声を出し」

舌が清浄になると、美しい声で聞く人を喜ばせ
教えを伝えることができると説かれます。
心の状態は声の調子や話し方に現れます。
怒りを含む言葉は相手の心を委縮させ、不安げ
に話せば相手の信用を得ることができません。
法華経を受持しよく学んでいれば心が安定し、
様々な状況に応じて巧みに説き、穏やかな言葉
で相手を安心させながら、教えに出会った喜び
を与えることができると説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

5日

仏滅 柳

旧3月8日

土曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

又諸天子天女

「清浄な舌で語る教えは全ての世界の住人に届く」

人間界ばかりでなく、天上界の住人、竜や夜叉、人に非ざる者たちなど、いのちあるものは、それぞれの感覚で教えを説く声を聞いています。さらには人の世でも、あらゆる地位や職業の人々も仏さまの教えを聞くことができます。清浄な舌で語られる仏さまの教えは、すべての世界の住人に届くのです。そしてお互いに清浄な舌で伝え合い、ともに仏に近づいていくのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

6日

大安 星

旧3月9日

日曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

じん ご ぎよう じゆ
尽其形寿

「このいのち尽きるまで」

一時的に多くの人から注目を惹くことができたとしても、その関心を永続きさせるのは容易なことではありません。

世の中は常に移り変わり、去年何が流行したのか思ひ出すことさえ難しくなっています。

大量の情報が世界中にあふれる現代社会ではなおさらです。

世の中がどう変わろうと、変わることはない仏さまの教えを清浄な舌で伝えなければなりません。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

7

日

赤口 張

旧3月10日

月曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

ぜ にんぜつこんじよう

じゆうふ

じゆあくみ

是人舌根浄

終不受惡味

ごう しよじきたん

しっかいじようかんみ

其有所食噉

悉皆成甘露

「清浄な舌で食事をいただき、法を説く」

この文は「食法」に用いられます。

食前に仏さまの恩に感謝し、命をいただく食材に供養し、仏道修行に励むことを誓い食事をいただく作法です。

清浄な舌によって食べるものはことごとく皆「甘露」となるとありますが、「甘露」は〈苦〉が消滅した平穏な心の状態を表しています。

清浄な舌で食事をいただき身体の栄養とするとともに、仏さまの教えを説き弘めましょう。

妙法蓮華經法師功德品第十七

鉄圀山大海 地中諸衆生 持經者聞香 悉知其所在 阿脩羅男女 及其諸眷屬

〈略〉

或在林樹下 專精而坐禪 持經者聞香 悉知其所在 菩薩志堅固 坐禪若誦經

〈略〉

得千二百舌功德。若好若醜。若美若不美。及諸苦澁物。在其舌根。皆變成上味。

如天甘露。無不美者。若以舌根。於大衆中。有所演說。出深妙聲。能入其心。皆

令歡喜快樂。又諸天子天女。釈梵諸天。聞是深妙音聲。有所演說。言論次第。皆

悉來聽。及諸龍。龍女。夜叉。夜叉女。乾闥婆。乾闥婆女。阿脩羅。阿脩羅女。

〈略〉

俱來聽法。以是菩薩。善說法故。婆羅門。居士。国内人民。盡其形壽。隨侍供養。

〈略〉

是人舌根淨 終不受惡味 其有所食瞰 悉皆成甘露 以深淨妙聲 於大衆說法

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

8日

先勝 翼

旧3月11日

火曜

妙法蓮華経随喜功德品第十八

へん まん さん ぜん かい ずい い そく のう し

徧満三千界 随意即能至

「世界中に意のままに教えが届く」

三千世界に満ち渡るように教えを説けば、意のままにその声が届くだろうと説かれています。

私たちはインターネット上で世界中にメッセージが届けられる現代社会に生きています。

それはお釈迦さまの時代にはなかったことです。が、自分の言動が世界に影響を及ぼすことができ、そのことから、なおさら自らを軽んじることなく、逆にうぬぼれることもなく、清浄な舌を得られるように仏道修行に励みましょう。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

9

日

友引 軫

旧3月12日

水曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

しん こん しょう じょう

身根清浄

「清浄な身体を得る」

身体の清浄とは、その人の姿を見た人も清浄な
気持ちになるということです。

人の心はその姿や表情に表われるものです。

仏さまの教えを心から信じ、人のために尽くそ
うと菩薩行に励んでいけば、仏さまのような人
だと拝まれる容姿が付いてくるものです。

逆に着ている服が立派でも、自分を中心にしか
物事を考えられない人は、その心が透けて見え
てしまうものです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

10日

先負 角

旧3月13日

木曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

によ じょう る り

如浄瑠璃

「浄瑠璃のような清らかな鏡となる」

「浄瑠璃」とは青いサファイヤのこと。

身体が「浄瑠璃」のように清浄となり、世の中のあらゆることが鏡に映るようにその身に描き出されると説かれています。

鏡に少しでも歪みがあると正しく映りません。

自分の都合でものを見ていると心の鏡も歪み、
真実の姿が映りません。

清浄な身は、世の中のあらゆる真実が
ありのままに映る鏡となるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

11日

仏滅 亢

旧3月14日

金曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

にやくじほ けきよう ごしん じんしょうじよう

若持法華経 其身甚清浄

「法華経を受持するならば その身は清浄となる」

この文は、水行(水をかぶる修行)をする前に唱える「水行肝文」に用いられています。

古来、水には靈力があり身心の垢穢を払うと信じられてきました。

泥にまみれた世間に染まることなく、身も心も清浄にするために水行をするのです。

法華経は「清浄な教え、清浄になる教え、清浄にする教え」であることを念頭に、清らかな水をかぶるために「水行肝文」をお唱えします。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

12日

大安 氏

旧3月15日

土曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

い こん しょう じょう

意根清浄

「心の清浄を得る」

「意根清浄」とは心に迷いがなくなり、一句一偈を聞いただけで仏さまの奥義に達することができると説かれています。

多くの仏教書や資料を読み散らかして、何となくわかったような気分になったとしても、奥義の入口にも到達していないものです。

心が清浄で迷いなく仏さまの教えを信じ切るところが、難しい理屈を学ぶよりも仏に成る近道になるということなのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

13日

赤口 房

旧3月16日

日曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

至し於お一いち月げつ四し月げつ乃ない至し一いつ歳さい

「心が清浄なら際限なく説くことができる」

心が清浄なら、一ヶ月から四ヶ月、あるいは一年と教えを説き続けても際限なく説くことができ、その説くところは仏さまの御心にかない真理と違背することはないと説かれています。仏さまの奥深い意義に達しているので、大事なことを伝え忘れたり、余計なことを加えたりすることなく、まとめて一言にして説くことも、広く解説を加え一年間かけて説くこともできるというのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

14日

先勝 心

旧3月17日

月曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

にやくせつぞつけんきようしよ

じせいごん

若説俗間経書

治世語言

ししやうごうとう

かいじゆんしやうぼう

資生業等

皆順正法

「世間の仕組みは仏法に従う」

「俗間経書」とは世間の倫理道徳などのこと。

「治世語言」とは世間を治めるための法律・制度。

「資生業」とは経済・経営の仕組み。

それら世間の仕組みと仏さまの正しい教えが一致していれば皆が幸せになれるわけです。

清浄な心をもって仏さまの教えを信じ、世間の仕組みの中で実践していくことが大事なのです。

正しい教えを立てれば人の心が正しくなり、国も安らかになるといふことです。

妙法蓮華經法師功德品第十九

徧滿三千界 隨意即能至 大小轉輪王 及千子眷屬 合掌恭敬心

〔略〕

復次常精進。若善男子。善女人。受持是經。若誦。若解說。若書寫。得八百身功德。得清淨身。如淨瑠璃。衆生喜見。其身淨故。三千大千世界衆

〔略〕

若持法華經 其身甚清淨 如彼淨瑠璃 衆生皆喜見 又如淨明鏡

〔略〕

復次常精進。若善男子。善女人。如來滅後。受持是經。若誦。若誦。若解說。若書寫。得千二百意功德。以是清淨意根。乃至聞一偈一句。通達無量無邊之義。解是義已。能演說一句一偈。至於一月四月。乃至一歲。諸所說法。隨其義趣。皆與實相。不相違背。若說俗間經書。治世語言。資生業等。皆順正法。三千大千世界。六趣衆生。心之所行。心所動作。心所戲論。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

15日

友引 尾

旧3月18日

火曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

しゅう

じ

ふ

もう

じやく

終始不忘錯

「始終忘れず、誤らず」

清浄な心で、仏さまの教えの奥深い意義をよく弁えて説くと、その教えが膨大でいくら説いても説き尽くせないことに気づくはずですが。

しかし、確固たる信心をもって教えを受持していれば、忘れることも、仏さまの御心と一致しないことを言うこともないと言われています。

あらゆるものの真実の相を知ることができれば理路整然と言葉にして相手に伝えることができるようになるのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

16日

先負 箕

旧3月19日

水曜

妙法蓮華経法師功德品第十九

じ ほつ け きよう こ

持法華経故

「法華経受持の功德」

法華経の法師とは僧俗男女の別なく、法華経を受持・読・誦・解説・書写の「五種法師」を実践する者のことです。

「五種法師」の実践により仏さまの教えが自分の心に染み込んでくると、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清浄になります。

法華経を受持するが故に、父母からもらい受けたこの身のままに仏に近づくことができることが「法師功德品」には説かれています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

17

日

仏滅 斗

旧3月20日

木曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

とく だい ぜい ぼ さつ

得大勢菩薩

「大きな力を得た菩薩」

勢至菩薩ともわれ、浄土思想では観音菩薩と共に阿弥陀仏の脇師となっています。

大きな力を得た菩薩の意で、迷いと戦いの世界の苦しみから智慧を持って救い、正しい行いをさせる菩薩とされています。

法華経では、『序品』で菩薩の会座に名を連れ、『常不軽菩薩品』ではお釈迦さまの対告衆（話しかける相手）として登場し、法華経の功德と未来世における弘通を勧められています。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

18日

大安 女

旧3月21日

金曜

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

ぎやく だい ざい ほう

獲大罪報

「法華経を謗る者には大きな罪の報いがある」

「大罪報」とは『法師品第十』にて説かれた「常毀罵仏 其罪尚輕」のこと。

末法の世で法華経を弘める人を毀(そし)る罪は、直接仏を罵(の)のしるより重いというのです。

末法には世が乱れて、仏さまの教えが伝わらなくなり、人の心はますます荒んでいきます。

その荒れた世において人々を救おうと教えを弘めようとする者は尊い者なので邪魔をしないようにと、お釈迦さまが述べられたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

19日

赤口 虚

旧3月22日

土曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

其所^ご得^{しよ}功^{とつ}徳^く

「其の得る所の功德」

「其の得る所の功德」とは『法師功德品』に説かれた「六根清浄」の功德を得るということ。

『常不軽菩薩品』では最初に、法華経を誹謗する罪と、法華経を信仰することを得られる功德を併記し、常不軽菩薩の物語に入って行きます。

常不軽菩薩を迫害した比丘たちの罪と、常不軽菩薩が法華経受持によって得た功德の伏線を張るような構成です。

物語としての展開の巧みさが感じられます。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

20日

穀雨

先勝 危

旧3月23日

日曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

い おん のう ぶつ

威音王仏

「大きな力で人々を感化させた仏」

「威音」とは感化を及ぼす声の意、「王」は優れている意で、「威音王仏」は教えを説く声に優れ、大きな力で人々を感化させた仏さまでした。

同じ名前の仏さまが二万億代にわたり存在し、最初の威音王仏が滅度した像法の時代に、常不軽菩薩が修行をしていたと説かれています。

像法は正しい教えが失われ、悟りを得たと思ひ込んでいる修行者が勢力を持った時代でした。

威音王仏の大きな力が消えた時代でした。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

21日

友引 室

旧3月24日

月曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

いてん にん あ しゅら せっぽう

為天人阿修羅説法

「天・人・阿修羅のために法を説く」

威音王仏は、その仏国土の住人である天人や人間や阿修羅のために、お釈迦さまと同じ方法で方便の教えを説きました。

すなわち、声聞を求めるときには「四聖諦」を、辟支仏を求めるときには「十二因縁」を、菩薩を求めるときには「六波羅蜜」を説かれたのです。

どんな仏さまでも皆同じように、先ずは個々の悩みを解決し、次に他者を救うために教えを弘め、仏を目指すようにとの手順で説くのです。

妙法蓮華經法師功德品第十九

為衆生說法 悉聞能受持 思惟無量義 說法亦無量 終始不忘錯 以持法華故

〔略〕

為一切衆生 歡喜而愛敬 能以千萬種 善巧之語言 分別而演說 持法華經故

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

爾時佛告。得大勢菩薩摩訶薩。汝今當知。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。

持法華經者。若有惡口。罵詈誹謗。獲大罪報。如前所說。其所得功德。如向所說。

眼耳鼻舌身意清淨。得大勢。乃往古昔。過無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。有佛名

威音王。如來。応供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。

佛。世尊。劫名離衰。国名大成。其威音王佛。於彼世中。為天人阿脩羅說法。為求

声聞者。説応四諦法。度生老病死。究竟涅槃。為求辟支佛者。説応十二因縁法。為

諸菩薩。因阿耨多羅三藐三菩提。説応六波羅蜜法。究竟佛慧。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

22日

先負 壁

旧3月25日

火曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

有うにまんのかぶつ二万億仏

皆かいどういちごう同一号

「二万億の仏の名前は皆同じ威音王」

二万億もの仏さまの名は皆同じ「威音王」だったと説かれています。

これは仏さまの教えが絶えることがないということを表しています。

一人の仏さまの教えが広まり、その仏さまが滅度され、また別の仏さまが現れて教えが広まる時期が来る。それが繰り返されるということです。その仏さままたちのお名前が皆同じであるというのは、同じように教えが広まるという意味です。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

23日

仏滅 奎

旧3月26日

水曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

お ぞう ぼう ちゆう

於像法中

「理屈ばかりを優先させる時代」

仏の教えを実行する者が多い時代が「正法」、仏の教えを実行するよりも研究や詮索することが主になる時代が「像法」です。

仏の教えを実行することなく、理論ばかりが優先され、理解したつもりになっている「増上慢」の修行者たちが勢力も持つ世の中です。

他者の中に仏性を見て敬い礼拝する常不軽の振舞いはまさに仏の教えの実践なのですが、逆に増上慢の者たちは常不軽を蔑みました。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

24日

大安 龔

旧3月27日

木曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

ぼ さつ び く

菩薩比丘

「仏に成ることを求めて修行する者」

「菩薩」は仏に成ろうと修行している者、「比丘」は修行者のことです。

「但行礼拝」をしている常不軽はまだ「菩薩」ではなく「比丘」でしたが、最後には仏になることを求めて進む「菩薩」の修行をしていたので「菩薩比丘」と表現されているのです。

悟ったつもりになり、そこで止まっているので仏に成ることができない増上慢の比丘たちとの対比も示しているのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

25日

赤口 胃

旧3月28日

金曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

みよう

じよう

ふ

きよう

名常不軽

「常不軽と名づく」

「常不軽」という名前は、出会う人ごとに合掌し「私はあなたを深く敬います。決して軽んじることはありません。あなたは仏さまになる人だからです」と礼拝していたことから「常に軽んじない」と名付けられたものです。

石を投げつけられても、杖で打たれても、常不軽は礼拝を続けました。

「誰もが仏に成れる」という仏の教えの肝心を伝える実践を続けたのが常不軽なのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

26日

先勝 昂

旧3月29日

土曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

たん ぎよう らい はい
但行礼拝

「常不軽菩薩の二十四字」

常不軽菩薩の二十四字といわれる「但行礼拝」の
理念が説かれた文です。

我深く汝等を敬う (私は深くあなた方を敬います)

敢て軽慢せず (軽んじたり侮ったりしません)

所以は何ん (なぜならば)

汝等皆菩薩の道を行じて

(あなた方は菩薩の道を修行し)

当に作仏することを得べしと

(必ず仏さまになれるからです)

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

27日

友引 畢

旧3月30日

日曜

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

ふ せん どく じゆ きよう でん

不專読誦經典

「經典を読むことなく、但行礼拝に專念した」

常不輕は經典を読むことなく、専らに但行礼拝の修行をしていました。

經典に説かれた理論を学ぶだけで実践を伴わない増上慢の比丘たちとの対比を表しています。

しかし、常不輕が法華経を読誦していないということは、「誰もが仏に成れる」という仏さまの教えに出会っていないなかつたということなのです。

そのために、常不輕の言葉は「仏さまの言葉」として伝わらず迫害されたのでした。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

28日

仏滅 畢

旧4月1日

月曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

遠見四衆

おん

けん

し

しゅ

「遠くから見かけてもそばに行き但行礼拝を行う」

常不軽は、修行者や信者だけでなくどんな人でも、遠くから見かけるとそばに行って但行礼拝をして声をかけました。

拜まれた人の中には馬鹿にされたように感じて怒り、石を投げたり杖でたたく者もいました。

怒った者たちは、心が歪んでいたので、自分が仏に成れる存在だと思えなかったのです。

日蓮聖人は常不軽の姿をどんな状況でも積極的に布教する折伏の手本としていました。

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

亦号威音王。如来。忘供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。如是次第。有二万億佛。皆同一号。最初威音王如来。既已滅度。正法滅後。於像法中。增上慢比丘。有大勢力。爾時有一菩薩比丘。名常不輕。得大勢。以何因緣。名常不輕。是比丘凡有所見。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。皆悉礼拝讚歎。而作是言。我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作佛。而是比丘。不專誦誦經典。但行礼拝。乃至遠見四衆。亦復故往。礼拝讚歎。而作是言。我不敢輕於汝等。汝等皆当作佛故。四衆之中。有生瞋恚。心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。從何所來。自言我不輕汝。而与我等授記。当得作佛。我等不用。如是虚妄授記。如此經歷多年。常被罵詈。不生瞋恚。常作是言。汝当作佛。說是語時。衆人或以。杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高声唱言。我不敢輕於汝等。汝等皆当作佛。以其常作是語故。增上慢比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。号之為常不輕。是比丘。臨欲終時。於虚空中。具聞威音王佛。先所說法華經。二十千万

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

29日

昭和の日

大安 鶯

旧4月2日

火曜

妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十

ひ
そう
おん
じゆう
避走遠住

「避け走り逃げ遠くから但行礼拝を行う」

常不軽は迫害されると逃げ去りながら遠くから同じように但行礼拝をしました。

日蓮聖人は、その姿をいかなる迫害を受けてもひるむことなく積極的に布教する折伏の手本とされました。

相手に受け入れられなくなった際には一旦相手の手の届かないところに退き、怒りが鎮まるのを待ち、改めて礼拝し素直に思いを伝えるという対応を繰り返されたのです。

法華経 日めくり

令和7年 乙巳

2025年

4月

30日

赤口 参

旧4月3日

水曜

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

に じゅう せん まん のく げ

二十千万億偈

「威音王仏の法華経説法を聞く」

常不軽は、臨終が迫ったときに威音王仏が説いた法華経の説法を聞き六根清浄を得ました。

それまで常不軽は法華経を誦読していなかったために、「誰もが仏に成れる」と但行礼拝を繰り返しても「仏さまの言葉」として伝わらず、迫害を受けてきました。

しかし法華経を聞いてからは、法華経に説かれたお釈迦さまの言葉として「あなたも仏に成れる」と人々を導けるようになったのです。

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛故。四衆之中。有生瞋恚。心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。從何所來。自言我不輕汝。而與我等授記。當得作佛。我等不用。如是虛妄授記。如此經歷多年。常被罵詈。不生瞋恚。常作是言。汝當作佛。說是語時。衆人或以。杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高声唱言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。以其常作是語故。增上慢比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。号之為常不輕。是比丘臨欲終時。於虛空中。具聞威音王佛。先所說法華經。二十千万億偈。悉能受持。即得如上。眼根清淨。耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已。更增壽命。二百万億。那由佗歲。広為人說。是法華經。於時增上慢四衆。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。輕賤是人。為作不輕名者。見其得大神通力。樂說辯力。大善寂力。聞其所說。皆信伏隨從。是菩薩。復化千万億衆。令住阿耨多羅三藐三菩提。命終之後。得值二千億佛。皆号日月燈明。於其法中。說是法華經。以是因緣。復值二千億